

織田作之助「六白金星」の執筆に関する考察

—『文藝』版草稿断簡の検討を中心として—

増田 周子

はじめに

織田作之助は、大正二年十月二十六日に、大阪市天王寺区生玉町に生まれ、平成二十五年十月に、生誕百年を迎える。太宰治、坂口安吾、檀一雄らと共に、無頼派と呼ばれ、主に、戦中・戦後の苦難の時代に活躍した。

昭和五十九年に創立した織田作之助賞も今年で三十回目となり、近年では石井しんじ氏、津村記久子氏、金原ひとみ氏らが受章されている。現在でも関西を中心として幅広い世代に人気を博し、織田の名声は衰えるところを知らない。

さて、織田作之助にとってこの記念すべき生誕百年の平成二十五年に、氏の文学や活動の功績を顕彰し、後世に引き継いでいこうと、織田作之助生誕百年記念推進準備委員会が発足し、委員長難波利三氏他三十名が集結した。本稿執筆者である増田もメンバー

の一人であるが、記念推進の一事業として、平成二十五年九月二十五日から十月十八日まで、大阪歴史博物館で「織田作之助と大大阪展」が開催されるに至ったのである。

今回報告する織田作之助「六白金星」の『文藝』版草稿断簡は、織田作之助生誕百年記念推進準備委員会が、織田作之助の資料を集める中で、平成二十五年九月に、織田禎子氏の所蔵する織田作之助の遺品からみつかったものである。新しく発見された『文藝』版「六白金星」の草稿断簡は、全部で、「蝸牛」というタイトルの四百字詰め原稿用紙一枚と、四百字詰め原稿用紙を半分に分けて使用した二百字詰め原稿用紙三枚である。

本稿では、『文藝』版「六白金星」に至る過程について、新資料を紹介するとともに、大阪府立中之島図書館所蔵の『文藝』版草稿も検討に加え、そこからわかる点を簡単に考察していきたい。なお、本稿は、拙編著『織田作之助と大阪』（平成二十五年三月三

十一日、関西大学大阪市遺産センター発行の論考を補完する意味を持つので、あわせてお読み頂ければ幸いである。

一、「六白金星」の作品発表経緯

今回発見された「六白金星」の『文藝』版草稿を説明する前に、「六白金星」発表の経緯について簡単に説明しておきたい。現在、『織田作之助全集』等に収録され、広く流布している「六白金星」は、昭和二十一年三月号の雑誌『新生』に発表されたものである。ただ、織田作之助が「あとがき」で、「『六白金星』といふ題で、同じやうな材料を、私は昭和十五年に書いたが、当時発表を許されなかつた。『新生』に載せたのは、べつに新しく書き直したものと述べるように、昭和十五年に、「六白金星」を既に発表しようとしていたのであった。それにもかかわらず、ついに、昭和十五年には、「六白金星」が発表されることはなかつた。昭和十五年に、織田が「六白金星」を発表する予定だった雑誌は、『文藝』であった。昭和十五年八月二十四日付の書簡で、友人である杉山平一に織田は次のように語っている。

『文藝』のオール創作号にのる筈だったが、削除された。(同誌のノンブルが飛んでいるのはそこにぼくのがあったわけ) 検閲の点で今までの行方はいけないことになり、いま新年を考えている。

実際に『文藝』を確認してみると、昭和十五年九月号は、織田が杉山に語るように、「ノンブル」が飛んでいるのであった。雑誌は、百三十〜百六十一頁が、欠損した形で発行されている。徳永直の「東京の片隅」という連載小説の最終回が百二頁〜百二十九頁に掲載されたあと、織田作之助の「六白金星」は、百三十〜百六十一頁に載るはずであったが、その頁に載せられた作品はなく、百六十二頁から林芙美子の小説「習作」が続いている。つまり、一部が切り取られた形で、昭和十五年九月号の『文藝』は発行することになったのである。一見して、体裁が悪いが、雑誌発刊直前に載せないことを決定して印刷したためであろう。織田の言うように、当時の検閲事情が関連し、出版社の都合で、掲載を見送らざるを得なかつたのであった。つまり、「六白金星」は、昭和十五年『文藝』版と、戦後の昭和二十一年『新生』版の二種類が存在するのである。前記『織田作之助と大阪』の中でも、当時の検閲事情について触れておいたが、「昭和二年の四月から昭和九年の四月まで」「改造」の編集をおこない、昭和八年十一月発行の改造社『文藝』創刊まもなくの頃に「編集に半年余り携はつた」上林暁が、後に編集者時代のことを回想した「編集者今昔」の中で、検閲に対して次のように述べている。

今になつて思つても、「改造」が発売禁止になつた時のことを考へると、悪夢の如き感じがする。内務省検閲課からの発

禁の通達で、社全体が忽ち暗黒の空気に包まれた。慌々しく内務省へ切取頒布を願ひに行くものもあれば、取次店へ電話をかけるものもある。社長を初め、編集部員も営業部員も、皆沈鬱な顔をしてゐた。社の浮沈にも関するほどの出来事なので、当然なことである。中でも、最も辛い立場にあつたのは、我々編集部員であり、更に編集主任であつた。

(中略)

実際、発禁は怖かつた。雑誌が校了になつても、検閲が無事通るまでは、安き思ひもしなかつた。電話のベルが鳴つても、発禁の通達ではないかと驚いた。だから僕たち編集者は、原稿の扱ひ方には、慎重に慎重を期さねばならなかつた。一度び失敗すると、当局の忌諱に触れ、社には大損害をかけることになるのである。そこで、危いと思はれる個所には伏字をするのだが、これが一通りの苦勞ではなかつた。執筆者が心血を注いだ原稿が、さう矢鱈に消せるものではない。

戦前の検閲は、全て内務省が行つており、安寧に関わるものと風俗に関わるものが処分の対象となつた。その検閲状況は厳しく、ここにあるように、編集者をはじめ出版社全体が、発禁の通達に常に怯えていたようだ。昭和初期には、発禁処分を防ぐため、伏字を施したりして対処していたようだが、編集者や出版社の神経を悩まし続けていた。昭和十三年に制定された国家総動員法が施

行された後は、ますます言論統制が激しくなつていった。昭和十五年に書かれた「六白金星」は、内容から見ても、安寧秩序に触れるとは考えられないので、風俗壊乱に触れるかもしれないと判断されたのだろう。戦時下の検閲の厳しい状況下において、改造社『文藝』は、「六白金星」の掲載に慎重になり、結局、掲載は見送られることになつたのである。

なお、本章以降は、昭和十五年に『文藝』に発表しようとしていたものを、『文藝』版「六白金星」、戦後の昭和二十一年『新生』に発表したものを『新生』版「六白金星」と、仮に呼称して論を進めていきたい。

二、草稿「蝸牛」ならびに三枚の『文藝』版「六白金星」草稿断簡

草稿の検討に入る前に、『文藝』版「六白金星」と『新生』版「六白金星」の違いを簡単にまとめておきたい。

平成二十三年に、関西大学大阪都市遺産研究センターは、「六白金星」の『文藝』版原稿を独自に入手した。これは、四百字詰原稿用紙三十六枚で、『文藝』版「六白金星」の前半部分で、作品全体の半分程度の原稿である。この『文藝』版「六白金星」の原稿は、冒頭を見ればわかるが、朱書きで『文藝』九月号と書かれ、間違いなく、改造社『文藝』の編集者が赤字を入れたゲラである。つまり、掲載前提の原稿であつた。本原稿は、昭和四十四年に伊

勢丹デパートで開催された「三人展」で展示された形跡はあるものの、その内容については、当時公開されることはなかった。冒頭一頁のみが、画像で紹介されただけである。また、平成二十三年に古書店が所蔵した時に大きく新聞報道されるに至ったが、いずれも、深い内容についてはふれられず、「三人展」図録と同様、冒頭の一頁が画像で載せられただけであった。

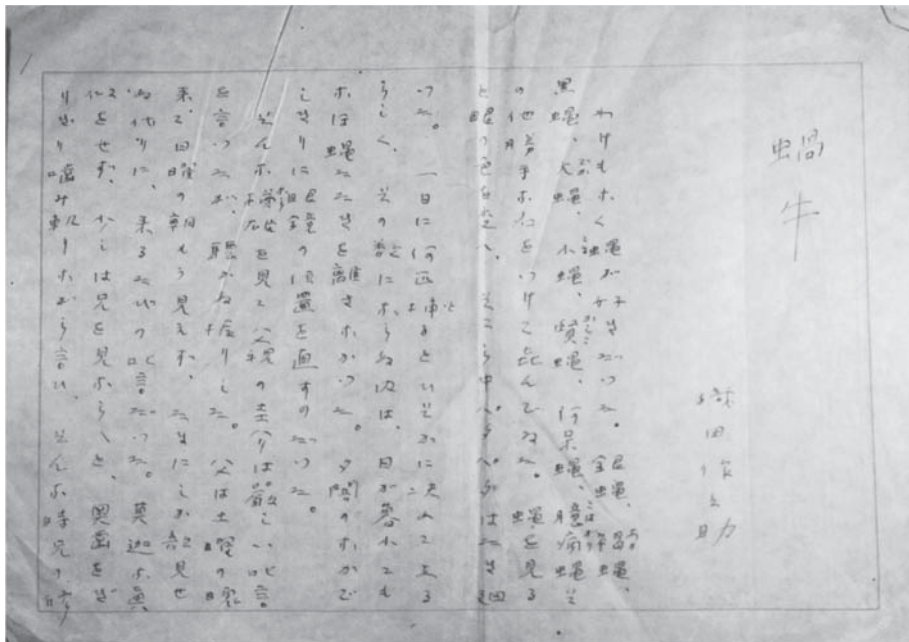
そこで筆者は、『織田作之助と大阪』で、『文藝』版原稿の全文を画像で公開し、全文翻刻をして、研究を進めた。その内容については、『織田作之助と大阪』に譲るとして、簡単に、『新生』版「六白金星」と、『文藝』版「六白金星」の内容の違いを説明していきたい。ただ、現在までに発見されている『文藝』版「六白金星」は、前半半分弱しか存在しないため、前半部分のみからわかる範囲の検討であることは、再度注意しておく。

『新生』版「六白金星」と『文藝』版「六白金星」は、どちらも、主要登場人物は同じである。地方の大病院に勤める妻子ある身の医者圭介は、看護師として働く村瀬寿枝と不倫関係になり、長男修一が生まれる。狭い土地で噂になることを恐れた圭介は、黙って関西に行き、何食わぬ顔で芦屋の医院を開業していた。圭介を追いかけて関西にやって来た寿枝には、香櫨園に妾宅を構えてやり、二年たつと、二男の榎雄が生まれるのである。兄修一は、父に似て、眉毛が濃く、ぎよろりとした眼を持ち、榎雄は、母に似て眼が小さく斜視気味で、眉毛が薄かった。また、修一は秀才

だが、不良で女たらしで、要領の良さも備えていた。一方、榎雄は早発性痴呆症気味で鈍才であった。『新生』版「六白金星」では、六白金星の星に生まれ、純粹で一途な性格ではあるものの、周囲とトラブル続きの榎雄が、正直で善良な雪江と暮らし、なんとか医者にもなり、徐々に、成功していく姿が描かれている。

『文藝』版「六白金星」の前半部分からだけでは、後半の榎雄の成功していく姿は確認できないが、『新生』版「六白金星」とは異なる面白さが描かれている。大きく異なる点は、数点ある。例えば、『文藝』版「六白金星」では、榎雄の同級生の黒ん坊という少年が登場する。榎雄は黒ん坊から、「紐の先に小刀ナイフをぶら下げて、ぶるんぶるんまはし、怖つて人が寄り付かぬと、こんどはひよいとまはして黒い鼻の上に小刀ナイフの切先を停め」るナイフの曲芸を習い、黒ん坊が呆れるほどにこの曲芸を練習するという描写がある。黒ん坊は、『新生』版「六白金星」には全く登場しない人物である。さらに、『文藝』版「六白金星」では、父が大学生の修一を、夏休みに白浜温泉にキャンプにやったのに、洲本に行かせてくれと頼んでも、行かせてくれなかったことに腹を立てた榎雄が家を出し、丸金醬油の運搬汽船の火夫となって小豆島に渡ったり、岡山で黒ん坊に習った芸当をやって見せて、サーカス団に面白がられて入団することになったりと、『新生』版「六白金星」には存在しない展開が描かれる。

では、今回発見された『文藝』版「六白金星」の草稿断簡をみ



織田作之助「六白金星」の執筆に関する考察

ていこう。まずは、次の一枚である。全文翻刻をしてみる。

蝸牛

織田作之助

わけもなく蠅が好きだった。銀蠅、褐蠅、黒蠅、大蠅、小蠅、賢蠅、阿呆蠅、臆病蠅その他勝手な名をつけて喜んでゐた。蠅を見ると眼の色を変へ、そこからパタパタはたき廻つた。一日に何匹捕るとひそかに決めてあるらしく、その数にならぬ内は、日が暮れてもなほ蠅たたきを離さなかつた。夕闇のなかでしきりに眼鏡の位置を直すのだつた。

そんな権雄を見て父親の圭介は厳しい叱言を言つたが、聴かぬ振りした。父は土曜日の晩来て日曜の朝もう見えず、たまにしか顔見せぬ代りに、来るたびの叱言だつた。馬鹿な真似をせず、少しは兄を見ならへと、奥歯をぎりぎり噛み軋りながら言ひ、そんな時兄の修

ここまでである。残念ながら、最後の「修」につながる草稿は見当たらなかつた。この草稿は「蝸牛」となっており、「六白金星」ではない。ただ、冒頭に、権雄の蠅を愛でる様子が描かれ、父の名前も圭介であることから、間違いなく「六白金星」の下書きであつたと断定できる。

ここで、『文藝』版「六白金星」の冒頭を引用してみたい。

理由もなく蠅が好きだった。銀蠅、褐蠅、黒蠅、大蠅、小蠅、賢蠅、阿呆蠅、臆病蠅、その他勝手な名をつけて喜んでゐた。年中蠅たたきでそこらちゆうパタパタやつた。日に何匹捕ると決め、捕れる迄は日が暮れても止めず、暗がりのなかでしきりに眼鏡の位置を直した。

そんな檜雄を見て父親の圭介はきびしい叱言をいつたが、聴かぬ振りした。父は土曜日の晩来て、日曜の朝もう見えず、たまにしか顔見せなかつたが、来るたびに叱言をいつた。馬鹿な真似をせずに勉強しろ、少しは兄を見ならへ、奥歯をぎりぎり噛み軋りながら父はいひ、そんな時兄の修一はわざとらしく読本を朗読してゐた。

非常に「蝸牛」と似ていることがよくわかる。一方『新生』版の冒頭は次の如くである。

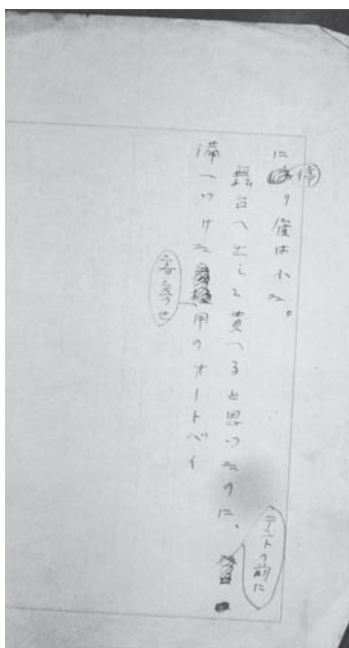
檜雄は生れつき頭が悪く、近眼で、何をさせても鈍臭い子供だった。ただ一つ蠅を獲るのが巧くて、心の寂しい時は蠅を獲つた。蠅といふ奴は横と上は見えるが、正面は見えず故、真つ直ぐ手を持つて行けばいいのだと言ひながら、あつといふ間に掌の中へ一匹入れてしまふと、それで心が慰まるらしく、またその鮮かさをひそかに自慢にしてゐるらしく、それが一層檜雄を頭の悪いしよんぼりした子供に見せてゐた。

ふと哀れで、だから人がつい名人だと乗せてやると、もうわれを忘れて日が暮れても蠅獲りをやめようとせず、夕闇の中でしきりに眼鏡の位置を直しながらそこから中睨み廻し、その根気の良さはふと狂気めいてゐた。

「蝸牛」は、『新生』版の冒頭よりも、より『文藝』版「六白金星」の冒頭に似ている。「蝸牛」を書き直して、タイトルを「六白金星」とし、『文藝』版「六白金星」として完成させたのだと言えよう。すなわち、「蝸牛」は「六白金星」の原題であつた。

織田禎子氏の資料から、あと三枚の草稿断簡も、みつかつた。いずれも、四百字詰め原稿用紙を半分につけて使用した二百字詰め原稿用紙三枚である。一枚ずつ紹介していきたい。

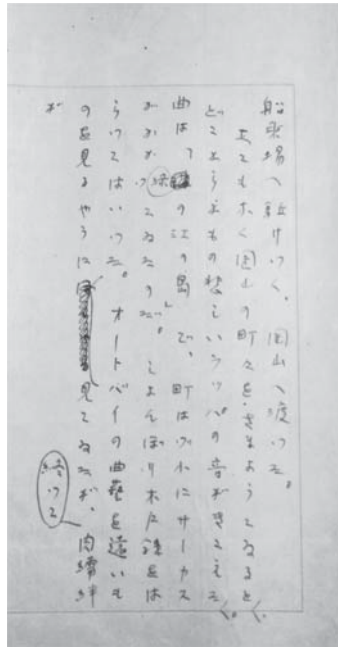
まずは、一枚目である。翻刻すると次のようになる。



に停り雇はれた。

舞台へ出して貰へると思つたのに、テントの前に、備へつ
けた客寄せ用のオートバイ

断簡なので、ほんの少しであるが、「客寄せ用のオートバイ」と
いうところから、『文藝』版の「六白金星」の草稿であると断言で
きる。もう一枚は次の通りである。



この部分も翻刻してみたい。

船乗場へ駆けつく、岡山へ渡つた。

あてもなく岡山の町をさまよっていると、どこからかもの
悲しいラッパの音がきこえた。曲は「緑の江の島」で、町は
ずれにサーカスがかかつてゐたのだ。しょんぼり木戸銭をは

織田作之助「六白金星」の執筆に関する考察

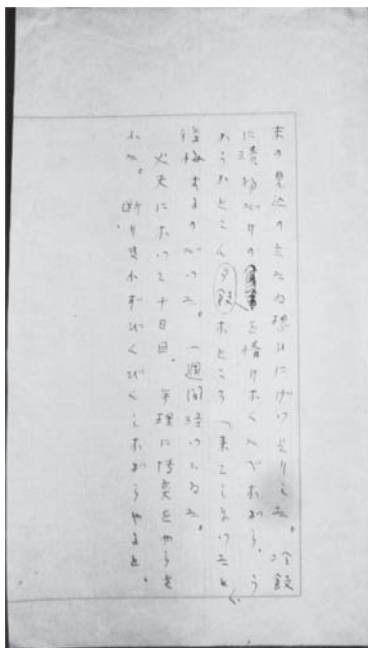
らつてはいつた。オートバイの曲芸を遠いものを見るやうに
見てゐたが、終つて肉襦袢が、

このように、大変短い草稿断簡である。「緑の江の島」とは、明
治四十三年一月に逗子開成中学の生徒が乗ったボートが転覆し、
十二人が亡くなったことを哀悼して、同年に作詞…三角錫子、作
曲…ガートンによつてつくられた「七里ヶ浜の哀歌」（真白き富士
の嶺）の冒頭の歌詞の部分を指すのであろう。同じような箇所を
『文藝』版「六白金星」から抜粋してみる。

船を降りると、その足で連絡船乗場へ駆けつけ、岡山へ渡つ
た。岡山の市外れにサーカスが掛つてゐたので、はひつた。
オートバイの曲乗りに感嘆したり、肉襦袢の少女にうつとり
したりして、これはデカダン趣味だと思つた。けれども見世
物が全部済み、夜も暗く落ちて来ると、さすがにしょんぼり
気が減入つた。所持金が一円足らずになつてゐることも心細
かつた。

草稿断簡と『文藝』版「六白金星」を見比べてみると、町（草
稿断簡）が市（『文藝』版「六白金星」）になるなど、一部異なる
ものの、かなり酷似している。一方、先にも述べたように、『新
生』版「六白金星」には、サーカス団などは全く登場しないので、

この草稿断簡も、確実に『文藝』版「六白金星」の草稿断簡だと
いえる。「蝸牛」から、「六白金星」に変更する過程で、織田は「緑
の江の島」の「もの悲しいラッパの音」が響く曲を省いたのであ
った。三枚目の草稿断簡について紹介してみたい。



末の見込の立たぬ想ひにげつそりした。冷飯に漬物だけの夕
飯を情けなくたべながら、うかうかとこんなところへ来てし
まったと、後悔するのだった。一週間経つてゐた。

火夫になつて十日目、無理に博打をやらされた。断りきれ
ずびくびくしながらやると、

この草稿断簡も極めて短いものである。火夫になるくだりも、
戦後に書かれた『新生』版にはなく、『文藝』版にしか存在しない

ため、『文藝』版の草稿断簡であることは自明の事実である。『文
藝』版の該当部分をあげてみると次の通りである。

無理に博奕をやらされ、所持金をまきあげられ、おまけに船長^{おやかた}
に五円の借が出来る。夜、別府航路の綺麗な汽船が沖合を大
阪の方へ通つて行き、その灯が悲しいほど明るかつた。冷飯
に漬物だけの食事を情けなくたべながら、「脱走」ときめた。

やはり、草稿と比較してみると、『文藝』版「六白金星」の完成
稿の方が洗練されていることがわかる。

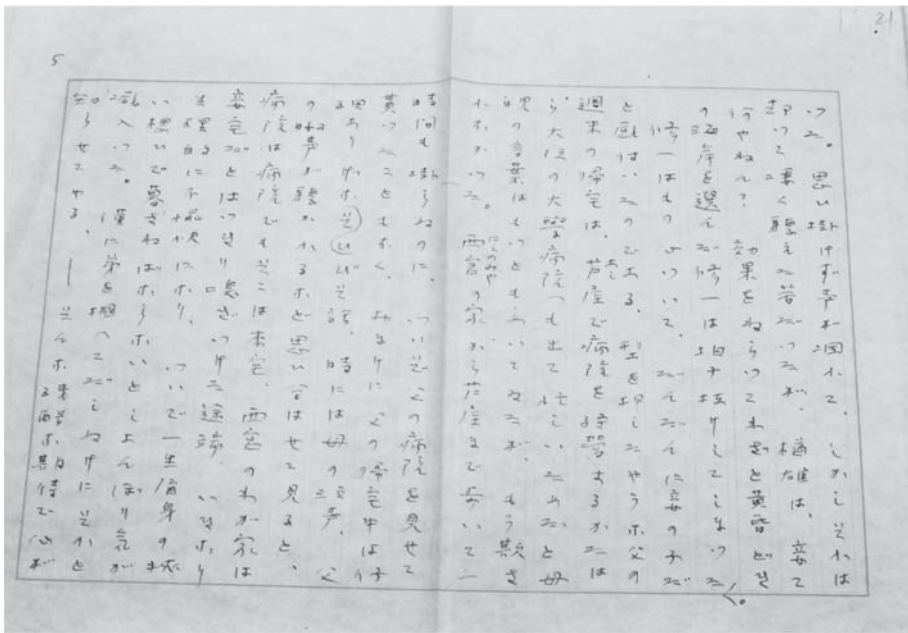
以上、四枚の『文藝』版「六白金星」草稿断簡を紹介し、簡単
なコメントを付け加えてみた。これら四枚の草稿断簡は、いずれ
も山吹色の既成の原稿用紙を用いている。ただし、「蝸牛」は、原
稿用紙の製品名が消えてしまっているのか、もともと記載がない
のか不明だが、記載がなく、残りの三枚も、四百字詰の原稿用紙
を半裁して使用しているため、どこの製品の原稿用紙なのかは判
然としない。また、「蝸牛」は、原稿用紙に「二」と記してあり、
「蝸牛」という題名もかかれていることから、冒頭部分であること
は間違いないが、残り三枚の草稿断簡が「蝸牛」の後半であるの
か、『文藝』版「六白金星」の下書きとしてまた別に書いたものな
のかも、これら四枚の資料だけでは判別することはできない。
ただ、いずれも『文藝』版「六白金星」の草稿断簡であるという

点は共通しており、既に述べたとおりである。

三、大阪府立中之島図書館「織田文庫」所蔵『文藝』版「六白金星」草稿

大阪府立中之島図書館「織田文庫」には「六白金星」の草稿が二十九枚残っている。そのうち、今回発見された四枚の草稿断簡と同じ色の四百字詰め原稿用紙に記した草稿が二枚ある。この中之島図書館所蔵の原稿用紙には久楽堂製の原稿用紙であると明記されている。この山吹色の久楽堂製原稿用紙は、昭和十五年頃に織田が好んで使用していたもので、中之島図書館所蔵の、昭和十五年頃に書かれた例えば「大阪発見」(『改造』昭15・8・1)や「子守歌」(『文藝』昭15・10・1)の草稿には、使用された例が確認できる。この中之島図書館の二枚の草稿も『文藝』版「六白金星」の下書きだった可能性が高い。それは次の二枚である。画像と翻刻を二枚合わせて紹介する。

つた。思ひ掛けず事が洩れて、しかしそれは却つて凄く聴えた筈だったが、楯雄は、妾でなんやねん？ 効果をねらつてわざと黄昏どきの海岸を選んだ修一は拍子抜けしてしまつた。修一はもの心ついて、だんだんに妾の子だと勘付いたのである。型を押ししたやうな父の週末の帰宅は、芦屋で病院を経営するかたはら大阪の大病院へも出て忙しかったためだと母親



の言葉はもつともめいてゐたが、もう欺されなかつた。西宮にしのみやの家から芦屋まで歩いて一時間も掛らぬのに、ついぞ父の病院を見せて貰つたこともなく、おまけに父の帰宅中は仔細ありげなひそひそ話、時には母の泣声、父の呟声が聴かれるなど思ひ合はせて見ると、病院は病院でもそこは本宅、西宮のわが家は妾宅だとはつきり嗅ぎつけた途端、いきなり生理的に不愉快になり、ついで一生肩身の狭い想ひで暮さねばならないとしよんぼり気が滅入つた。

『文藝』版「六白金星」の完成原稿の同じ部分をあげてみると次のとおりである。

中学校へはひつた年の夏、修一は何思つたのか、檜雄を香櫓園の海岸へ連れ出し、いきなり、おい、檜雄、わいらは妾の子やぞ。思ひ掛けず声がかすれて、けれどもそれは却つて凄く聞えた筈だつたが、檜雄は、妾何やねん。効果をねらつてわざと黄昏どきの海岸を選んだ修一は、そんな檜雄の頼り無さを見て拍子抜けした。——修一はもの心つき、だんだんに妾の子だと感付いた。型を押しした様な父の週末の帰宅は、芦屋あしで病院を経営するかたはら、大阪の大学病院へも出て忙しいためだと、母親の言葉はもつともらしかつたが、もう欺されなかつた。西宮にしのみやの家から芦屋まで往復二里の道のりだの

に、ついぞ父の病院を見せて貰つたこともなく、おまけに父の帰宅中は仔細ありげなひそひそ話、時には母の泣き声、父の呟声が聴かれるなど思ひ合はせてみると、病院は病院でもそこは本宅、西宮のわが家は妾宅だと、はつきり嗅ぎつけた途端、いきなり生理的な不快さが来て、ついで、一生肩身の狭い想ひで暮さねばならぬとしよんぼり気が滅入つた。

ほぼ酷似しているが、完成原稿の方が、やはり歯切れがいい。『新生』版の該当箇所は次のとおりである。

中学校へはいつた年の夏、兄の修一がなに思つたのか檜雄を家の近くの香櫓園かぶらえんの海岸へ連れ出して、お前ももう中学生だから教へてやるがと、チロリと檜雄の顔を覗き込みながら、いきなり、

「俺たちは妾の子やぞ。」

と、言つた。ふと声がかすれ、しかしそのためかへつて凄んで聴えた筈だがと、修一は思つたが、檜雄はぼそんとして、「妾何やねん？」

効果をねらつて、わざと黄昏刻の海岸を選んだ修一は、すっかり拍子抜けしてしまつた。

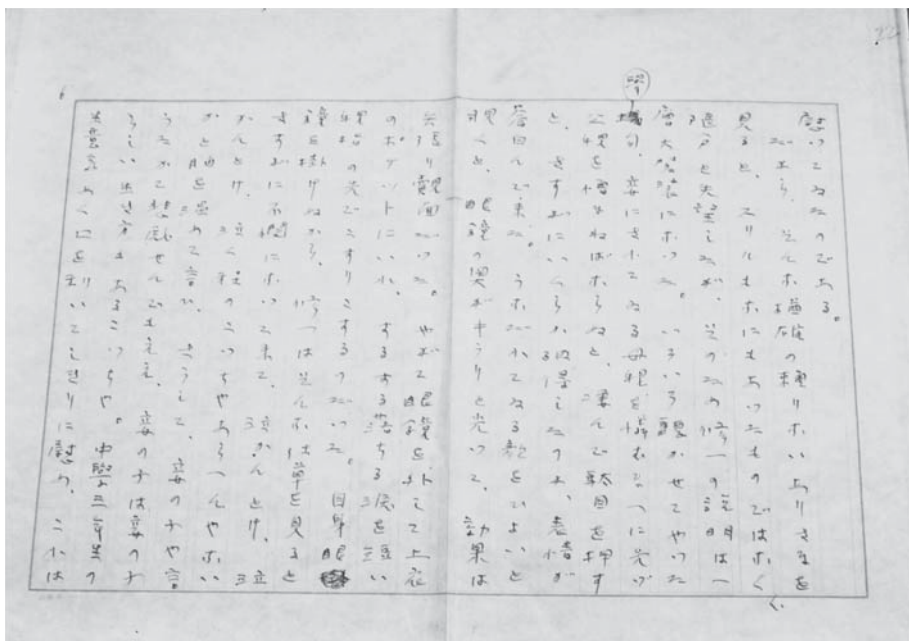
修一は物心つき、次第に勘付いてゐるのだ。型を押ししたやうな父の週末の帰宅は、蘆屋で病院を経営するかたはら、大

阪の大学病院へも出て忙しいためだとの母親の言葉は、尤も
 らしかったが、修一は欺されなかつた。香櫛園の自宅から蘆
 屋まで歩いて一時間も掛らぬのに、つひぞ父の病院とやらを
 見せて貰つたこともなく、おまけに蘆屋中を調べてみても自
 分と同じ村瀬の姓の病院はない。しかも父の帰宅中は仔細あ
 りげなひそひそ話、時には母の泣声、父の呟声が聴かれるな
 ど、思ひ合はせてみると蘆屋の方が本宅で香櫛園のわが家は
 妾宅だと、はつきり嗅ぎつけた途端、まづ生理的に不愉快に
 なり、前途が真つ暗になつたやうな気持ちに悩まされた

同じような、状況を描いているが、中之島図書館所蔵の山吹色
 の草稿は、『新生』版よりも『文藝』版に似ていることがわかる。
 もう一枚も紹介しよう。

慰つてゐたのである。

だから、そんな檜雄の頼りないありさまを見ると、スリル
 もなにもあつたものではなく、随分と失望したが、そのため
 修一の説明は一層大袈裟になつた。いろいろ聴かせてやつた
 挙句、妾にされてゐる母親を憐むまへに先づ父親を憎まねば
 ならぬと、凄んで駄目を押しすと、さすがにいくらか納得した
 のか、表情が蒼白んで来た。うなだれてゐる顔をひよいと覗
 くと、眼鏡の奥がキラリと光つて、効果は矢張り靨面だつた。



やがて眼鏡を外して上衣のポケットにいれ、するする落ちる涙を短い親指の先でこすりこすりするのだつた。自身眼鏡を掛けぬから、修一はそんな仕草を見るとさすがに不憫になつて来て、泣かんとけ、泣かんとけ、泣く程のこつちやあらへんやないかと胸を温めて言ひ、さうして、妾の子や言うたかて悲観せんでもええ、妾の子は妾の子らしい生き方もあるこつちや。中学三年生の生意気めく口を利用してしきりに慰め、これは

『文藝』版「六白金星」の完成原稿の同じ部分をあげてみると次のとおりである。

そんな残酷な期待で心が慰つてゐた。——妾テ何やねん。ほんととした声で檜雄に問はれて、スリルも何もあつたものではなく、随分と失望したが、ために修一の説明は一層大袈裟になつた。いろいろ聴かせてやつた揚句、妾にされてゐる母親を憐むまへに先づ父親を憎まねばならぬと、凄んで駄目を押すと、さすがに檜雄もいくらか納得したのか、表情が蒼白んで来た。うなだれてゐる顔をひよいと覗くと、眼鏡の奥に涙が見えて、効果はやはり靦てん面めんだつた。やがて眼鏡を外してポケットにいれ、するする落ちる涙を短い親指でこすり、こするのだつた。自身眼鏡を掛けぬ修一はそんな仕草を見ると

さすがに不憫で、泣かんとけ、泣かんとけ、泣くほどのこつちやあらへんやないか。胸を温めていひ、さうして妾の子や言うたかて悲観せんでもええ、妾の子は妾の子らしい生き方もあるこつちや。中学三年生の生意気めく口を利用してしきりに慰め、これは自分にもいひ聴かせた。

この部分も、『文藝』版に、酷似していることがよくわかる。また、中之島図書館の草稿は五・六と頁がつけられてあり、続き物である。『新生』版ではこの部分は、次のとおりである。

それだけに檜雄のそんな態度は修一を失望させた。そのため修一の話は一層誇張された。さすがの檜雄も急に顔色が青白んで来た。うなだれてゐる檜雄の顔をひよいと覗くと、眼鏡の奥が光つて、効果はやはりテキ面てきめんだつた。やがて眼鏡を外して上衣のポケットに入れ、するする落ちる涙を短い指の先でこすり、こするのだつた。ふと修一は不憫になつて、

「泣くな。妾の子らしい生きて行かう。」

これまで記してきたように、山吹色の久樂堂製原稿用紙に書かれた中之島図書館の「六白金星」の草稿は、『新生』版より『文藝』版に似ていることがわかった。『文藝』版の草稿だといえるだろう。

四、初版本『夫婦善哉』『あとがき』草稿の検討

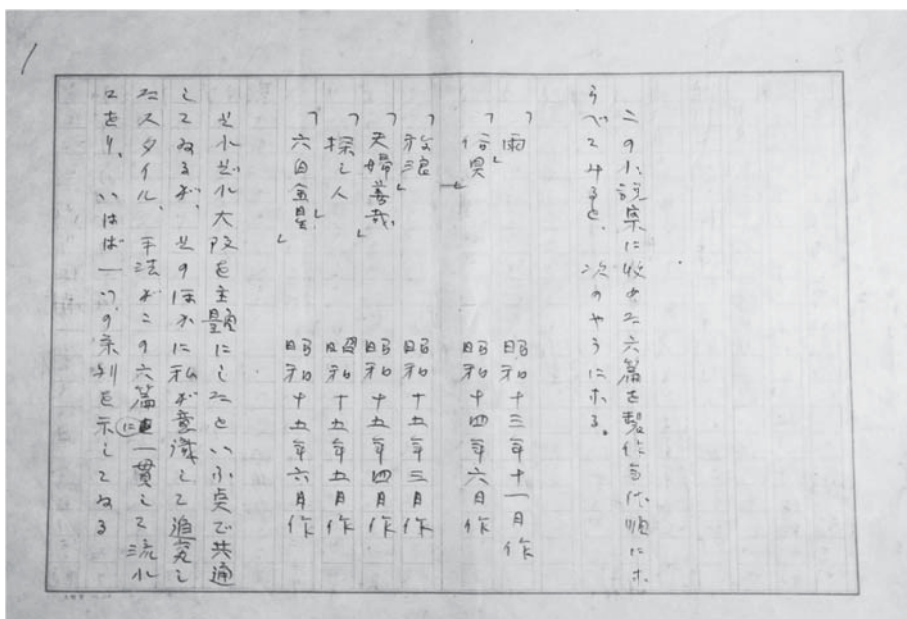
織田作之助生誕百年記念推進準備委員会が拝借した織田禎子氏の織田作之助遺作資料の中に、初版本『夫婦善哉』『あとがき』草稿が存在した。「六白金星」を考えるうえで重要なものなので、まずはあげて翻刻してみる。

この小説集に収めた六篇を制作年代順にならべてみると、次のやうになる。

- 「雨」 昭和十三年十一月作
- 「俗臭」 昭和十四年六月作
- 「放浪」 昭和十五年三月作
- 「夫婦善哉」 昭和十五年四月作
- 「探し人」 昭和十五年五月作
- 「六白金星」 昭和十五年六月作

それぞれ大阪を主題にしたといふ点で共通してゐるが、そのほかに私が意識して追求したスタイル、手法がこの六篇に一貫して流れており、いはば一つの系列を示してゐる

以上が、初版本『夫婦善哉』（昭和十五年八月十五日、創元社）



「あとがき」草稿である。この草稿から、『文藝』版「六白金星」は、昭和十五年六月には書かれていたことが判明した。つまり、織田作之助は、六月に『文藝』版「六白金星」を書き、そして、

前略

「六白金星」(八十二枚)本日別便(書留速達)でお送りしました。八月号にご掲載下されば幸甚です。何月号に御掲載していただけますか御一報下されば安心出来ますから。右御願ひします。「夫婦善哉」の世界⁵⁾

という書簡を『文藝』編集部に送ったのである。

この草稿は、初版本『夫婦善哉』が発刊される、昭和十五年八月十五日以前に書かれたものと考えられるが、おそらく、織田が「六白金星」を昭和十五年六月に脱稿してまもなく記した草稿であろう。「六白金星」を脱稿してまもなくの時、初版本『夫婦善哉』に、『文藝』版「六白金星」を収録しようと織田は考えていたのであった。

では、実際の初版本『夫婦善哉』の「あとがき」を見てみよう。先にあげた初版本『夫婦善哉』「あとがき」草稿では、六作の作品をあげ、「それぞれ大阪を主題にしたといふ点で共通してゐるが、そのほかに私が意識して追求したスタイル、手法がこの六篇に一貫して流れており、いはば一つの系列を示してゐる」と書いてい

た。同じようなことが記されている箇所を、初版本『夫婦善哉』の「あとがき」から抜き出してみる。織田は次のように記している。

この単行本に収められた五つの作品は何れも大阪を主題にした小説である。と同時に、これらの五片には私が意識して追求した或るスタイル、手法が一貫して流れていると言へば言えるかも知れぬ。いわばこれらの作品は一つのロマン(物語)形式の上に成り立つものである。この形式が今後どのように、私の作品の上で変化して行くかは、いまにわかには予言しがたいが、たとえどのように変化して行くにしろ、これら一列の作品をここに集めてみることは、これが私のはじめの作品集であるという喜びとは別に、何かそこはかとなき意義を感じるのである。

草稿で書かれた「大阪を主題にした」初期作品に見られる「意識して追求したスタイル、手法」は、具体的には「ロマン(物語)形式の上に成り立つ」一列の作品であることが、初版本『夫婦善哉』の「あとがき」から判明する。初版本『夫婦善哉』の「あとがき」では、その「ロマン(物語)形式」の内容について、収録した作品それぞれについてさらに詳しく書かれるが、ここではそれは割愛する。初版本『夫婦善哉』「あとがき」草稿はあくまで

下書きであるので、織田の書きたかったことがほんの一部書かれたメモ的なものであるが、初版本『夫婦善哉』の「あとがき」では、織田の意図がより明確なものとして記されるのである。

「六白金星」は『文藝』に掲載されなかったため、初版本『夫婦善哉』は、次の五作が収録された。初出誌とともにあげてみる。

「雨」

昭和十三年十一月『海風』

「俗臭」

昭和十四年九月『海風』

「放浪」

昭和十五年五月『海風』

「夫婦善哉」

昭和十五年四月『海風』

「探し人」

昭和十五年五月『週刊朝日』

つまり、『文藝』版「六白金星」は、昭和十五年六月に書き終わり、発行までのほんの一、二か月くらいの間に、掲載を見送られたのである。

繰り返しになるが、初版本『夫婦善哉』「あとがき」草稿で、注目しなければならぬ点は、「六白金星」は、実際に収録された「雨」「俗臭」「放浪」「夫婦善哉」「探し人」ら五作とともに、大阪を主題にした「意識して追求したスタイル、手法」を駆使した「口マン（物語）形式」的作品であると、織田が記している点である。ほんの少しの間に掲載を見送られることになったが、織田にとっては、処女創作集に収録すべき大切な作品であったのだった。

なお、「六白金星」を掲載しなくても、この初版本『夫婦善哉』は、警保局図書課から、『夫婦善哉』のうち、「九五頁（放浪）、一六七、一七〇、一八一、一九四頁（雨）ハ露骨ナ性欲描写ノ記事ナリヨツテ削除⁶⁾」と削除処分を受けた。正確な処分の日付けは、昭和十五年八月十七日である。

五、織田作之助「六白金星」原題

「蝸牛」というタイトルに込めた意味

さて、何故「六白金星」は、もとは「蝸牛」という題であったのだろうか。

織田作之助に「大阪の女」というエッセイがある。このエッセイは、昭和十八年九月に明光堂書店から発刊された『大阪の顔』に収録されている。織田は、この「大阪の女」で、夫婦のことを表す「いかけ」という大阪言葉があったことを「知っている人は、すくなくと思う」と言い、その「いかけ」という言葉は次のようなことが由来だと述べる。「明治の頃、大阪の町町を、夫婦づれの鑄掛け屋が共に働き、『いかけエーいかけエ』、と夫婦声を合わせて呼びながら練りあるき、評判になった。以後夫婦のことを『いかけ』と称ぶようになった」と説明するのである。続けて織田は、この「大阪の女」の中で、「一時、夫婦共稼ぎをまるで新しい女性の倫理のように言っていた時代があるが、実はこれは大阪の女性が古くからもっている倫理である。お望みなら言おう、伝統であ

る」と大阪の女性の特質と伝統について書いていく。織田は、大阪の女性は、享楽を求めて夫婦共稼ぎをするのではなく、「苦勞を樂しむ為にお嫁に行く」ので、それは、「近松以後の大阪の女性が持っている最もあやかに美しい倫理」なのであると述べる。つまり大阪の女性は「自らを犠牲にする」という美德を持ち合わせているのである。このように、大阪の女性は、控え目で、自己犠牲をして支え、「いわば蝸牛のように伝統の殻の中に閉じこもっている」と織田は言う。大阪の女性を「蝸牛」と織田が形容していることは、注目に値する。さらに、織田は「蝸牛の美」は伝統に閉じこもっているばかりでなく、次のような性質も持っていると言及する。

この可憐な蝸牛の美は、その鋭角な觸覚をもって、実に柔軟に外界に適応して行くのである。つまりは、時代への適応性に富んでいるのである。この適応性は、ややもすれば、不和雷同性、即ち知性の欠如から来た模倣という風に、早まって考えられ易いのであるが、しかし、大阪女が適応性と同時に獨創性を持っていることは、塩昆布のような食物を工夫したという点からもうなずかれる、と言っては余りにこじつけだろうか。

すなわち、大阪の女性の特質である「蝸牛の美」とは、伝統を

守りながらも、時代に適応し、獨創性も發揮するというものだと織田は言うのだ。また、織田は、獨立資本のない勲の未亡人たちが、共同出資の株式組織で勲洋裁店を開業して遺児を養い、「利益を公平に分配しつつ、新しい獨立にそなえるためにその一部を積立てるといふ新しい方法」を生み出した点を褒め称え、次のように記す。

こうした前人未踏の生活様式の中へ、女の、物おじせず、恥ずかしがらずに飛び込んでいくところに、私は大阪女のもつ逞しい生活力への自信があると思う。彼女たちは絶望しないのだ。執拗に生き抜いて行こうという勁さがあるのだ。困難に出くわしても、それで負けてしまわず、適応性と獨創性を利用して、新しい体制の中へ勇敢に飛び込んで行けるのである。従って、憂鬱でない。深刻でない。愚痴っぽく言挙げしたりしない。黙々とことを行つて、朗かである。

この大阪女の勁さをおつて人びとはえげつない、と顔負けした。そして、この「えげつなさ」の中にかくされた美を、ややもすれば、見失っていた。しかし、お望みならば言おう、この勁さの中にある美こそ、大阪女の永遠に美しい美として、今日再び発見さるべきものである。

伝統を守りながらも時代に適応し、獨創性も發揮する「蝸牛の

美」を「大阪女の永遠に美しい美として、今日再び発見さるべきもの」と織田は述べている。この「大阪の女」というエッセイは、戦中に書かれたもので、おそらく、戦時下の困難な時代に、大阪の女性の持つ「蝸牛の美」が日本を支える底力となると考え、「今日再び発見さるべき」と書いたのではないか。こう考えると、「六白金星」の最初のタイトル「蝸牛」という題は、大阪の女性を中心に書こうとしたためにつけられたのではないかと考えられる。そして作品「蝸牛」は、織田の言う「蝸牛の美」を浮き彫りにしようとしていたのではないだろうか。

ここで、「六白金星」を思い出してみよう。『新生』版「六白金星」の後半は、楯雄が医者になり、伝染病院に勤務したり、京阪マーケットのお菓子売り場で駄菓子の売り子をしている器量の余り良くない雪江と同棲をする場面が書かれる。雪江は、博打や酒に入り浸っている鍼力職人の父に飛田の遊郭へ売られそうになり、それに抵抗して家を出て、このマーケットで働いていた。そんなひどい目にあわされそうになっても、雪江の月給の半分は父に送っていることを楯雄に打ち明けた。楯雄は、雪江の正直なところに惹かれ、恋仲になり、たちまち同棲する。身なりもポロポロで医者らしくもない楯雄は、医局でも変人扱いされる。そんな楯雄を心配した母寿枝は、楯雄の居所を捜して追いかけた。母は楯雄のいない間に、どうか楯雄と別れてくれと雪江に頼む。母の涙を見た雪江は、楯雄と別れると寿枝と約束する。帰宅した楯雄は、

「莫迦野郎！俺に黙ってそんな約束をする奴があるか。」と呶鳴りつけて、

「運勢早見書」の六白金星のくだりを見せ、

「俺は一端かうと思ひ込んだら、どこまでもやり通す男やぞ。別れるものか。お前も覚悟せえ。」

と言い、翌日、引越しし、移転先は病院へも秘密にし、そして「俺ハ考ヘル所ガアツテ好キ勝手ナ生活ヲスル。干渉スルナ。居所ヲ調べルト承知センゾ。」といふ葉書を母と兄宛に書き送るのであった。一度決めたら最後まで信念を曲げずにやり通す楯雄の強い根性が伝わる描写である。

「六白金星」は、このように、若い頃は周囲とトラブル続きだが損得勘定を持たず、純粋で一本気の「六白金星」生まれの楯雄が徐々に出世していく作品である。楯雄は、自分と同じ名棋士が「六白金星」の星生まれであることを知り、将棋にのめり込み、最後は、一度も勝てなかった兄修一に将棋の勝負に挑む。『新生』版の最後の場面は、次の通りである。

盤の前に坐ると、楯雄は、

「俺は電話が掛つてから今日まで、毎晩寝ずに定跡の研究をしてたんやぞ、あんたとは意気込みが違ふんだ。」

と言ひ、そしていきなり、これを見てくれ、とコンクリー
トの上へ下駄を脱いだ。見れば、その下駄は将棋の駒の形に
削つてあり、表にはそれぞれ「角」と「龍」の駒の字が彫り
つけられてゐるのだつた。

修一はあつと声をのんで、暫らく榎雄の顔を見つめてゐた
が、やがてこの男にはもう何を言つても無駄だと諦めながら、
さア来いと駒を並べはじめた。

織田は結末を記さないが、読者は、大器晩成型の「六白金星」
の榎雄は、いよいよ修一に勝つのではという期待を抱くのである。
このように、『新生』版「六白金星」は、「蝸牛」とは異なり、あ
くまで榎雄が主人公である。もちろん『文藝』版「六白金星」も、
タイトルが「六白金星」である以上、榎雄が主人公であることは
間違いないだろう。

さて、現在残っている『文藝』版の原稿は、四百字詰め原稿用
紙三十六枚で、字数にして、十四万四千字程度である。前半部分
のみで、後半は存在しない。ただ、織田が記した葉書によると「六
白金星」（八十二枚）とあることから、全体では単純計算で三十
二万八千字となる。戦後に発表された雑誌『新生』版の「六白金
星」は、字数を数えると約二十一万字程度で、およそ、『文藝』版
の三分の二である。すなわち、『文藝』版の原稿は『新生』版よ
り、長いと考えられる。

本稿で紹介した『文藝』版草稿断簡は、前半部分なので、雪江
は登場していない。また、『文藝』版の原稿も前半部分しかないた
め、後半に確実に雪江が登場するかどうかを確かめる手立ては、
現段階ではない。そうではあるが、もう一度、織田が雑誌『文藝』
に宛てて記したと考えられる葉書について考えてみよう。そこに
は、織田は、『文藝』版「六白金星」について「夫婦善哉の世界」
と記している。このことは、注目すべきである。「夫婦善哉」は、
周知のとおり、昭和十五年七月に、改造社第一回文藝推薦賞を受
賞した作品で、織田の出世作となった大阪を舞台にした作品であ
る。「夫婦善哉」は、道楽放蕩の柳吉を一人前の男にしてやろう
と、年下の蝶子が自分を犠牲にして支え、柳吉が病気になつても
献身的に看病する。出しゃばらず、辛いことにも負けず、一生懸
命尽くすのである。それだけでなく、蝶子は、時代に合った商売
をし、徐々に成功していく。まさに、織田の言う「蝸牛の美」を
備えた女性である。ただ、この「夫婦善哉」では、成功するのは
蝶子であり、柳吉はそれに便乗しているだけである。あくまで、
二人の成功と言うより、蝶子の芯の強さや柳吉を支える姿に主眼
がおかれている。

「六白金星」に戻ろう。先にも述べたように『文藝』版の「六白
金星」原稿は、後半が存在しないため、雪江が登場するかどうか
定かではないが、おそらく雪江が登場し、榎雄を支え、そして、
大器晩成していくさまが描かれていたのではないか。そうすると、

織田が「夫婦善哉の世界」と書簡に記した意味がわかるのである。『文藝』版の原稿は、全編では『新生』版「六白金星」よりは長い。ため、雪江が檜雄にとつて重要な女性である点も、『新生』版よりは、より細やかに描写できるだろう。『新生』版でも、雪江によって心が救われ、檜雄が強くなってくる部分はあるが、『文藝』版の原稿では、『新生』版よりも檜雄の心の拠りどころとしての雪江が活写され、檜雄の良さを引き出すように描かれるのであろう。すなわち、『文藝』版の原稿は、「夫婦善哉」の路線を幾分か継承しつつも、雪江という大阪女がいるために、鈍才で、早発性痴呆症気味で、周囲とトラブル続きだが、だんだんと強くなって出世していく檜雄を主人公として描き、「六白金星」というタイトルにしたのではないかと推察される。こう考えると、織田が「夫婦善哉の世界」と書簡に記したことが生きてくる。

最後に、『文藝』版「六白金星」のものとタイトルは「蝸牛」だった点を考えてみよう。「六白金星」の主要登場人物の女性は寿枝と雪江である。寿枝は、父圭介の財産の一部を父が死ぬ前に自分で自分用としてとっておいたり、世間体を気にしたりと、俗っぽい打算的などころが見られる。一方、雪江は、先にも述べたように、純粹無垢で、正直な女性である。こうしてみると、「蝸牛」というタイトルの草稿では、雪江を中心とした大阪の女の「蝸牛の美」を書こうとしたのではないかと考えられる。つまり、草稿「蝸牛」は女性が主人公であったのだろう。ただし、それだけでは進

まなくなり、また、女の自己犠牲や独創性を描く「蝸牛の美」だけでは、直前に書いた「夫婦善哉」のテーマとはほぼ同じになってしまう、面白くないため、今度は、女性の「蝸牛の美」を浮き彫りにするだけでなく、その大阪女の出会いと賢明なサポートによって、どうしようもない男が成功する姿を描こうと考え、「六白金星」とタイトルも変更し、檜雄を主人公として描いたのであろう。檜雄は、雪江の自己犠牲の美に出会わなければ、こんなに強くなれなかったはずだ。だが、戦前には検閲で発表させてもらえなかった。そのため、戦後の雑誌『新生』でも、長さは短いながらも、雪江の良さや、檜雄が雪江に出会うことによって、より大きな立派な男になっていく姿を描いていったのである。

終わりに

本稿では、「六白金星」『文藝』版草稿断簡の検討を中心として、「六白金星」の執筆に関する考察をしてきた。今回わかった最も重要な点は、「六白金星」の元のタイトルは「蝸牛」であったということである。さらに、初版本『夫婦善哉』に、「六白金星」を収載しようとしていたことも判明した。織田自身も「六白金星」の星の生まれであり、この作品には、相当な思い入れがあったと考えられる。本稿では、少ない資料の中から、『文藝』版「六白金星」の後半の内容や、織田が、もともとは、「六白金星」を「蝸牛」というタイトルにしていた理由について、推察してきた。織田禎子

氏所蔵の草稿断簡の中には、今回紹介した以外にあと二枚二百字詰の山吹色原稿用紙の、「六白金星」の草稿らしきものもあったが、確認できないため、本稿の考察対象とはしなかったことも付言しておく。

現在、『文藝』版の原稿の後半は、行方しれずであるが、どんな内容だったのだろうか。『新生』版と異なる部分も多いことから、本稿が推察の域を脱しえない可能性もあるため、実際に後半を見て検討する必要があるだろう。『文藝』版の原稿の後半の出現を期待したい。

本稿は、織田作之助生誕百年記念推進準備委員会ならびに織田禎子氏のご協力の上でまとめることができた。皆様に、感謝申し上げます。

注

- (1) 織田作之助「あとがき」(『六白金星』昭和二十一年九月三十日、三島書房)
- (2) 上林暁「編集者今昔」(『書評』昭和二十三年七月一日、第三卷第七号)
- (3) 『織田作之助 田中英光 坂口安吾 三人展』(奥付発行年月日なし、大阪巧芸社製作)会期昭和四十四年一月十四日～二十六日
- (4) 例えば、「織田作之助の未発表原稿、東京の書店で見つかる」(『読売新聞』平成二十年二月五日夕刊)や、「織田作之助…もう一つの『六白金星』…未発表作発見 一九四二年、検閲で掲載不許可に」(『毎日新聞』平成二十年一月二十五日)などと報道され、話題をよんだ。ここで、『毎日新聞』は、「四二年に検閲により掲載不許可になった原稿とみられる」と紹介しているが、一九四〇年の間違いである。

(5) 中之島図書館『織田文庫』では、発行年月日、宛先不明

(6) 警保局『出版警察法』昭和十五年五月六月号、第二二八号(昭和五十七年三月三十日、不二出版)

(7) 同右

(8) 同右

A study of the writing of Oda Sakunosuke's “*Rikuhaku kinsei*”

—Focusing on the analysis of fragments of
a draft manuscript of the *Bungei* version

MASUDA Chikako

There are two versions of Oda Sakunosuke's short story “*Rikuhaku kinsei*” (六白金星): one intended for the journal *Bungei* in 1940, the other published after the war in the journal *Shinsei* in 1946. The *Bungei* version could not be published because of wartime censorship. But in September 2013, the unpublished manuscript of an afterword to the first edition of Oda Sakunosuke's *Meoto zenzai*, a collection of short fiction published in 1940, was discovered among materials in the possession of Oda Teiko. This manuscript confirms that the author had originally intended to include “*Rikuhaku kinsei*” in this collection—an indication of the importance he assigned to this work. Four pages of “*Rikuhaku kinsei*” draft manuscript fragments were also part of this September 2013 discovery — all of them from a draft manuscript of the 1940 *Bungei* version of the story. A comparative reading of the newly discovered fragments was conducted against about the first half of the *Bungei*-version “*Rikuhaku kinsei*” manuscript, now in the possession of Kansai University. The initial title for the *Bungei* version of “*Rikuhaku kinsei*” was “*Katatumuri*” (The Snail). Why? This paper, while introducing these valuable draft manuscript fragments for the *Bungei* version of “*Rikuhaku kinsei*,” uses this new materials to explore the riddles surrounding the origins of “*Rikuhaku kinsei*.”